

“What Is Man?” の “man” の意味¹

和栗 了

“What Is Man?” (1906) の “man” は一般的な「人間」を指すと考えられることが多い。というのも、Mark Twain は人間の悪徳や運命や人間の本質を何度も作品で扱ってきたからである。もっとも典型的な例は *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889 年) であろう。この作品の中で語り手 Hank Morgan は六世紀の人々が人間ではなく動物だと繰り返し主張している。No. 44, *The Mysterious Stranger* (1969 年) の No. 44 も人間個人の存在意義について否定的な意見を述べている。晩年の Twain が悲観的人間観を強めていったと言われているがゆえに、“What Is Man?” についても、一般的な人間についての議論として捕らえる批評家が多い。特に Twain の作品に決定論や進化論の影響を読み取る読者は “What Is Man?” を人間論として読もうとする。²

だが、“What Is Man?” は人間観という壮大な哲学を論じたというより、いくつかの事例を挙げて、「老人」と「若者」の二人が論じ合った対話と言った方がよい。体系的、論理的人間論というよりは老人の繰言と思えてならない。そう思える最大の根拠は彼らの対話中に挙げられた例の多くが男性の事例であることだ。彼らの論争は男性に関するものが中心なのである。つまり、“man” は「人間」ではなく「男」として読んだ方がこの対話を理解しやすいであろう。そして Twain は “What Is Man?” で偏った男性論と女性論を展開しながら、何か別のものを論じようとしているのではないか。

最近 Twain の文学世界を家庭や家という観点から見直そうとする考え方が提示されている。³ “What Is Man?” を男性と女性が作り上げるもの、男性が家庭を

どのように見ているかを問う作品として読み直すことができるのではないか。OLD MANはどのような家庭生活を送ってきたのか、推測しながら読むと“*What Is Man?*”は新たな老人の姿を見せてくれるだろう。

1

“*What Is Man?*”の中で使われる“man”という語は、「人間」という意味ではなく、「男」あるいは「夫」の意味で使われている場合が多い。まず、次の引用で“man”は明らかに「男」の意味である：

A man who loves peace and dreads pain, leaves his pleasant home and his weeping family and marches out to manfully expose himself to hunger, cold, wounds, and death.

(*What Is Man?* 15-6)⁴

この場合、“his weeping family”がこの男の妻と子供を指すのか、男の両親や兄弟姉妹などを指すのか明確ではない。だが出兵するのは明らかに「男」である。

さらに、次の例でも“man”は「男」あるいは「夫」の意味である：

They hang a man—which is a trifling punishment; this breaks the hearts of his family—which is a heavy one. They comfortably jail and feed a wife-beater, and leave his innocent wife and children to starve. (47)

この最初の“a man”には家族があり、これとは別の人物“a wife-beater”は妻と子供のいる「夫」である。“a man”と“a wife-beater”とが並列されることで、“a man”が「人間」ではなく「夫」と読まれるように巧みに仕組んである。

他方で、人間や人類を明確に指す場合には“man kind”や“human being”や“human race”という語が使われ、「男」と「人間」とは明確に区別されている。例

えば、OLD MAN は “That we (mankind) have ticketed ourselves with a number of qualities to which we have given misleading names.” (28) と言うし、YOUNG MAN も “From the cradle to the grave, during his waking hours, the human being is under training.” (43) と主張している。“What Is Man?” の “MAN”、“Man”、“man” のすべてが「男」の意味だとは言えないとしても、多くの場合「男性」を意味している。これらの語がたとえ曖昧な使われ方をしても、「男」の意味を内包したままで使われていることは明らかだ。もちろん OLD MAN も YOUNG MAN も “MAN” である以上、二人とも男であることはゆるぎない前提である。

二人の男が “man” について語るとき、彼らが “What Is Man?” の中で言及している例やたとえ話は圧倒的に男性に関するものが多い。具体的に名前が挙げられているのは、William Shakespeare、Alexander Hamilton、Homer、Sir John Lubbock、Thomas Edison、George Washington、Otto von Bismarck、Ignatius Loyola、*Berkeley Castle* 号の兵士達、Francisco Pizarro、John William Burgess、Henry Adams、David、双子の Henry と George、などが挙げられている。Adam もこの例に入るだろう。

これに対して、女性の例は、一般的な母親の母性愛を論じたもの、YOUNG MAN の母親や召使の Jane と Aunt Sally、さらに Mrs. W くらいしか扱われていない。このようにとりあげる例にかたよりがあること自体に OLD MAN の論理の問題点がある。

まず、OLD MAN の主張はステレオタイプ化された男女観に立脚している。男性は外で名誉と自己肯定 “Self-Approval” を求めて働き、女性は家庭を守るという概念を OLD MAN は信じている。Alexander Hamilton は家庭を捨ててまでも自己の名誉のために決闘をしたのだ、と OLD MAN は賞賛する：

He deeply loved his family, but to buy public approval he treacherously deserted them and threw his life away, ungenerously leaving them to lifelong sorrow in order that he might stand well with a foolish world [...]. Hamilton’s act was compelled by the inborn necessity of contenting his

own spirit; [...].

(17)

Alexander Hamilton は世論を味方につけるために家族を捨て、自身の心の満足を得ていた、として OLD MAN は彼を賞讃する。男性側の勝手な論理はこの後も繰り返され、OLD MAN は “A man performs but *one* duty—the duty of contenting his spirit, the duty of making himself agreeable to himself.” (20) とまで言う。男というものは家庭を犠牲にしてまで自己肯定を得ようとする生き物だと OLD MAN は褒め称える。

もちろん OLD MAN は立派だと思われる男の実態を弁護すべくこのように言い張るのだ。しかしながら、老年になってもなお、このような主張をせねばならない人物に滑稽さと悲哀を感じるのは限られた読者だけだろうか。男は家の外で仕事と名誉のために戦い、女性は家庭を守るものだとするステレオタイプ化されたジェンダー観の上に OLD MAN は空しく仁王立ちして、男を演じ、勝手な論をまくし立てているだけだ、というのは読みすぎだろうか。

OLD MAN の議論をもう少し虚心に聞かねばならない。“What Is Man?” の OLD MAN と YOUNG MAN の議論で最も白熱する部分は、人間の言動の根本的理由に関する論争だろう。OLD MAN は人間行動の根底には自己利益しかないと主張し、例を挙げて説明する。先の Alexander Hamilton の例から始まり、自己肯定を得るために見知らぬ人を殺害するケンタッキー人、他人のために命を捧げる軍人へと話は広がる。英雄的な自己犠牲と見える行為がすべて自己満足を得るためのものでしかないと OLD MAN は分析する。

これに対し YOUNG MAN は反論を試みる。火が燃え盛る家から子供を救出した男性や溺れかかった人を助けた男性、兵士だけでなくその妻や子供を乗せたまま沈没した *Berkeley Castle* 号の話を立て、自己犠牲はあり得ると主張する。

しかし、YOUNG MAN の反論は OLD MAN によって簡単に否定されてしまう。OLD MAN は人々の行動の根底にあるものは自己肯定だという。これを求めて男は自己犠牲に見える行為を演ずるのだという。“It was a noble duty, greatly performed” (39) とか、“He could not perform that duty for duty’s sake, for that

would not content his spirit, and the contenting of his spirit must be looked to *first.*” (41) と OLD MAN は言う。つまり、男は自己犠牲のように見える行為を “perform” することで、自らの “spirit” を満足させているだけだと OLD MAN は主張する。

OLD MAN の主張によれば、“man” は自己肯定を得ることだけを最終目的とした機械 (machine) でしかないという。機械としての “man” がどのように訓練や教育を受けるかによって、自己犠牲とも見える行為をすることがあると OLD MAN は主張する。そして彼の主張の基本的構図は一貫している。OLD MAN は “man” の根底にあるものを “Master” と読んだり、“form” という語を用いて説明したりする。外的影響を与えるものを経験や訓練と言い換えもする。自由意志 (“Free Will”) などの神学的意味を持つ語も使う。だが彼の考えの根本は、“man” というものは自己満足を得ることを第一目的として作られた機械だということである。そして OLD MAN はこれを言葉を変え、時間をおいて、幾つもの例を分析しながら、何度も繰り返している。

2

OLD MAN は、極めて明快な論理を展開しているかのように思われるが、実は論理的におかしな部分がある。若い臆病な男の話をしている時、OLD MAN も YOUNG MAN も議論の齟齬に気付かない：

O. M. He *could not originate the idea*—it had to come to him from the *outside*. And so, when he heard bravery extolled and cowardice derided, it woke him up. He was ashamed. Perhaps his sweetheart turned up her nose and said, “I am told that you are a coward!” It was not *he* that turned over the new leaf—she did it for him. *He* must not strut around in the merit of it—it is not his.

Y. M. But anyway, he reared the plant after she watered the seed.

O. M. No. *Outside influences* reared it.

(10-11)

勇敢という概念を女性が生み出したのかどうか、OLD MAN も YOUNG MAN も全く言及していない。もし「人間 (“man”) は何も新しいものを生み出さない」と OLD MAN が主張するのであれば、彼が使う “man” という語には女性も含まれるはずだ。だとすれば女性も新しいものを生み出せないことになる。しかしながら、上の OLD MAN の説明では男性に勇気を抱かせたきっかけは女性だという。女性の中に何かが閃いたと言える。その閃きも外的なものによるとは OLD MAN は言っていない。

また、YOUNG MAN が OLD MAN に本当に反論するのであれば、「女性が新しいものを始めることをあなたは認めている」と OLD MAN に詰め寄ることができたはずである。ところが YOUNG MAN は「女性が種に水をやった後で」と言うのだ。「女性が種を蒔いた後で」とは言わない。“What Is Man?” は OLD MAN が YOUNG MAN を教え諭すような体裁になっている以上、YOUNG MAN が OLD MAN の議論をこのように助けている場面もかなりある。

さらに、“What Is Man?” には OLD MAN と YOUNG MAN との共同謀議に近い部分がある。この二人は共同してある存在のことを無視している。Adam をも取り上げ、あいつは機械だったと断ずる OLD MAN だが、イエス (Jesus) のことに言及していない。YOUNG MAN は “sacrifice for the glory of God and for the cause of Christ” (31) とまで言いながら、イエスの死は人間としての自己犠牲であったかどうか、OLD MAN に問いただそうとしない。もちろん三位一体説を信ずるキリスト教徒は、神と聖霊とキリストは一体であり、イエスは人間ではないと考えるのが一般的だ。しかしながら、イエスは人間であるとする宗派もある。キリスト教徒にとって信仰の根幹にかかわるイエスの十字架上の死という巨大な問題を OLD MAN も YOUNG MAN も見事に避けているのだ。

また、OLD MAN が言うように、神は人間を性善な生き物として創造せず、人間は外的影響によってしか教化訓練されないとすれば、人間を善の方向に最

初に向かせたのは誰かという疑問が生ずる。人間が生れ持ったものが自己満足を求める欲望のみであるとすれば、快適さを求めて善行を行うという OLD MAN の説は現実を無視し浅薄である。少なくとも無法状態に近かった1860年代の Nevada の鉱山町を想像できる者にとってはこのように短絡的な説は納得しにくい。

人間の本質について議論すること自体が OLD MAN の策略であり、読者を YOUNG MAN のように説き伏せることが OLD MAN の目的かもしれない。だとすれば OLD MAN の議論に巻き込まれないために、「人間」論ではなく「男」論あるいは「女」論が必要になる。

女性と男性の話に戻れば、何か新しいことを始めるのはいつも女性だとする考えは、“Eve’s Diary” (1906) でも繰り返されている。⁵ そのまま信ずることはできないとしても、Eve は火を発見し、それを自分が創ったと語っている。Twain もすべての元が Eve だとは書いていないけれども、それでも、蛇に誘惑されたとはいえ、最初に禁断の木の実を手にしたのは Eve である。Adam は人間だったし機械だったと言う OLD MAN も、なぜか Eve には言及していない。Adam はこの世界に死をもたらした人類最初の偉大な恩人であり、賞賛に値すると Twain は *Pudd’nhead Wilson* (1894) の中で述べているが、その起因は禁断の木の実を最初に手にした Eve だったと考えられる。⁶ Eve が人間の本質を創った大元であるかどうか議論の余地は残るけれども、OLD MAN が Eve に言及しないのはおかしい。OLD MAN はイエスだけでなく Eve をはじめ女性のことも口にしたくないのだ。OLD MAN の説は人間を論ずるには一方的で不十分なのである。

それでも、男は生み出さない性だ、という論理に従えば、Eve に言及しないことも納得できる。新たな生命を生み出す性としての女性と生み出さない男性とは根本的に存在意義が異なる、この対話は男しか論じていない、と OLD MAN が主張するのであれば、“What Is Man?” は男の懺悔ということになろう。だが、この二人の男たちはあくまで男の立場から主に男を論じているのであって、男女の根本的な相違について明確な発言をしていない。肉体的にも精神的

にも生み出す性としての女性、あるいはそのことを十分に意識している Eve のような女性も OLD MAN にも YOUNG MAN にも扱いにくいのだ。

ところで、OLD MAN という語にはセクシュアルな意味がある。「夫」という意味から派生したものだろうが、「男根」を指す場合がある。セクシュアルな意味での “old man” が自己満足のためだけに生きていると OLD MAN が主張するのであれば、彼の主張は納得できる。性欲がどのような形で満たされることを求めるものだとすれば、同じように “man” も満たされることを求めているといえる。

二人の男たちは男性と同じように女性をも論じようとしている。女性も自己肯定を手に入れようとしていると OLD MAN は主張する。男性は外から見られることを意識した生き物であるのに対して、女性は直接的に子供のためになることをして自己肯定を得ているというのが OLD MAN の考えである：

The mother will go naked to clothe her child; she will starve that it may have food; suffer torture to save it from pain; die that it may live. She takes a living *pleasure* in making these sacrifices. *She does it for that reward*—that self-approval, that contentment, that peace, that comfort. *She would do it for your child* IF SHE COULD GET THE SAME PAY. (19)

子供のために自らを犠牲にする母親を分析しているが、子供の養育を一方的に母親に求める OLD MAN の主張は女性の母性を理想化し賛美しているとも言える。

だが、この部分は Samuel Langhorne Clemens の微妙な気持ちを読み取ることができる。息子 Langdon は 1872 年 6 月ジフテリアで亡くなる。Mark Twain は長男を殺したのは自分の不注意だ、自分が冷たい風に当てたからだ、自分を責める文章を自伝に記した。⁷ あの時息子にもう少し服を着せておけばよかった、もう少し暖かくしておけば、と作家 Twain は自分を責めている。この自責の念

と「母親は自分が着る物がなくても子供に服を着せるものだ」とする主張は、Twainの心の奥底でつながっているようだ。“The mother”をOliviaと読み替え、“her child”をLangdonと読み替えれば、この文章は夫Samuelが妻Oliviaに宛てた恨みの文章としても読める。息子の死に関して表向きは「自分の責任だった」と書いておきながら、「妻が身を呈して息子を守ってくれたら」と密かに記したとすればMark Twainの心情は複雑だと言える。つまり理想化された母親像をOLD MANに賞讃させることでTwainはOliviaに恨み言を言っているのかもしれないのである。だとすれば、OLD MANの女性論は複雑なものを秘めている。彼の理想的女性論は、Oliviaやその他の女性たちに対するTwainの不満を密かに代弁している部分もあるのだ。

二人の対話で挙げられる例が数量的に偏っていると先に述べた。彼らを取りあげる例には、別の観点から見ると、男女のあいだで大きな相違がある。彼らが議論する男性の例は歴史上の有名な人物や新聞等で報道された例である。これに対して女性の例はYOUNG MANの家の中の人物か彼の非常に親しい人物である。つまりOLD MANは有名な男と家庭的な無名の女性を対立させて人間を論じようとしているのだ。OLD MANの議論が一方的で家庭を無視したものであることは、このような例の偏りからも明らかなのである。

逆に見ると、OLD MANの身近に女性はいないのだろうし、献身的に彼の世話をしてくれる女性もいないに違いない。OLD MANが近くに献身的な女性がいてもなお、人間は自己肯定のためだけに生きている、と主張するのであれば、OLD MANはまったく身勝手な憐れむべき老人である。⁸

女性をも分析したつもりになり、男性をも論じたOLD MANは最終的に人間の普遍的本質を否定する。OLD MANによれば、人間と動物とは大差ないという。ねずみも人間も何をしなければならぬか訓練されているだけにしか過ぎないという点で同じだとOLD MANは主張する。人間は良心や向上心を教え込まれているだけであり、そのほうが社会全体の、同時に個々の人間にとっても、利益になるので、善のように見える性質を持っているだけだとOLD MANは指摘する：

I think that the rat's mind and the man's mind are the same machine, but of unequal capacities — like yours and Edison's; like the African Pygmy's and Homer's; like the Bushman's and Bismarck's. (76-7)

このように主張したくなるほど、あるいはこのように主張せねばならないほど、OLD MANの人生は空しいものだったと推測できる。OLD MANの浅薄な否定的人間観が執拗に繰り返される時、読者は辟易する。そしてOLD MANが “Is the human race cheerful? You know it is. Considering what it can stand, and be happy, you do me too much honor when you think that *I* can place before it a system of plain cold facts that can take the cheerfulness out of it.” (109) と断言する時、この老人に憐れみと同情を感じる。

3

OLD MANに反発を感じるのは読者だけではない。YOUNG MANもOLD MANに対して反発を感じている。

OLD MANの議論の進展に対するYOUNG MANの反応を見なければならない。YOUNG MANは最初OLD MANの議論に好意的である。YOUNG MANは当初OLD MANの説のメモをとり、従順な協力者として振舞っていた。YOUNG MANの協力的な態度は、彼が “Go on” とか “Explain” と繰り返して、OLD MANの説明を引き出し、“What do you mean by that?” と論理を確認したりすることでも明らかだ。

さらに、YOUNG MANは自己の経験をOLD MANの主張に立脚して説明しようとする。YOUNG MANの乳母のSallyの小屋 (cabin) が燃えたときには、YOUNG MANは自らの馬を売ってAunt Sallyにお金を与える。この行為そのものが自己肯定を求めるものだと、YOUNG MAN自身が答えを出し、説明している：

I know your whole catalogue of questions, and I could answer every one of them without your wasting the time to ask them; but I will summarize the whole thing in a single remark: I did the charity knowing it was because the act would give *me* a splendid pleasure, and because old Sally's moving gratitude and delight would give *me* another one; and because the reflection that she would be happy now and out of her trouble would fill *me* full of happiness. I did the whole thing with my eyes open and recognizing and realizing that I was looking out for *my* share of the profits *first*. (58)

まるで YOUNG MAN は OLD MAN の説に完全に心酔したかのようだ。

しかしながら、YOUNG MAN は OLD MAN の説明に最終的に同意していない。彼は OLD MAN が狂っていると見なし、“Are you determined to go on believing in these insanities? Would you go on believing in them in the face of able arguments backed by collated facts and instances?” (74) と問いたです。さらに、YOUNG MAN は OLD MAN の主張を “Those drunken theories of yours” (76) とまで言い、OLD MAN の説の矛盾と荒唐無稽さを指摘する。YOUNG MAN は急激に意見を変えたのである。

“What Is Man?” が対話形式で進む以上、各部分の終りにはまとめか両者の合意が必要であろう。少なくとも途中までは YOUNG MAN も OLD MAN に賛意を示しており、両者の間にある程度の意見の一致があったはずである。ところが、どうも二人の対話は決着していないし、合意にも達していない。各章の最終部分を見ると、全六章のうち、I 章を除いてすべて OLD MAN の独白に近い台詞で終わっている。つまり、OLD MAN の発言に YOUNG MAN は最終的同意を与えていないのである。もっとも明らかな例は IV 章と VI 章の最終部分である。

IV 章では、環境によって人の性質はどれほど変わるのか論じられている。その議論に結論を下すように、OLD MAN は双子の兄弟 Henry と George の寓話を

最後に得意げに語る。立派な牧師になった Henry は浮浪者になった George を牧師館に迎え入れる。牧師館の前を町の名士が通った時、無法者 George に聞こえるように Henry は “Without intending me a discomfort, that man is always keeping me reminded of my pinching poverty, for he carries heaps of money about him, and goes by here every evening of his life.” (62) と洩らすのだ。これを聞いたごろつきの George はこの金持ちから金を奪うのである。そして外的影響のために Henry と George は全く違う大人になった、Henry は立派だ、George は強盗になったと OLD MAN は結論付けている。

しかしこの双子のうち本当に悪意があるのは牧師の Henry である。まず、実際に金を奪った George とあいつの金がほしいとほのめかした Henry との間に、どれほどの違いがあるだろうか。聖書には、淫らな気持ちで女性を見ることは実際に姦淫を犯すことと同じだと書いてある。⁹ あの金がほしいと Henry が考えたのは明らかだ。さらに、自分の発言により George が強盗を働くことを Henry が期待していたとしたら、立派な牧師 Henryこそ悪党である。IV 章の最後は OLD MAN による “It had never entered the head of Henry to rob the man—his ingot had been subjected to clean steam only; but George’s had been subjected to vaporized quicksilver.” (62) という結論で終わるのだが、これは Twain の読者には同意できない結論である。この双子が11年の隔たりのあとでも、同じ物欲を持っていることを、Henry に悪意があることを、OLD MAN は見抜いていない。この結論を YOUNG MAN がどのように受けとめたか記されていない。だが OLD MAN の浅薄な洞察力に YOUNG MAN が少なくとも同意していないのは明らかだ。

VI 章の最後にある OLD MAN の宗教論は、まるで Huck の父親が酒に酔った時の論のようだ。それぞれの国家の独善性に対して OLD MAN は “each nation *knowing* it has the only true religion and the only sane system of government” (108) と鋭く批判し、人類の楽天性については “Is the human race cheerful? You know it is.” (109) と皮肉っている。しかし OLD MAN の主張はいずれも一方的で、偏見に立脚している。論理の展開は紋切り型で、批判や反対論を考慮したものではない。YOUNG MAN が言う通り、OLD MAN の説は “drunken

theories”であり、反論には値しない。従ってOLD MANの「酔っ払った」独白にYOUNG MANが言葉を付け加えないのは当然だ。

途中までYOUNG MANがOLD MANの説を肯定していたのは事実だとしても、YOUNG MANがOLD MANの説明に辟易していることは明らかだ。ただし、YOUNG MANは言葉で表現していない。無言の拒否という形式をとっているのだ。No. 44, *The Mysterious Stranger*のAugust Feldnerが無言の怒りでNo. 44の否定的人間観を拒否したように、YOUNG MANはOLD MANとの対話を拒否し彼の主張に同意しないことでOLD MANを否定しているのであるのである。¹⁰

OLD MANの主張は根本的に男性中心の偏見に立脚している。自分一人の精神的満足を得るためであれば家庭を捨ててもよい、家族を泣かすことになってもかまわないとするOLD MANの説は、Aunt Sallyの小屋焼失の件で、威力を失っている。SallyがYOUNG MANに施しを求めに来た時、YOUNG MANは*Pudd'nhead Wilson*のTom Driscollのように、「世話の焼ける黒んぼめ」と思ったはずだ。なぜならYOUNG MANは馬を一頭売ったのだから。軽蔑しながら施しを与えるYOUNG MANの屈折した心情を、自己肯定を得るための行為だとOLD MANは単純に説明しようとする。家庭内で繰り広げられる複雑な心の動きをOLD MANは理解していない。あるいは理解したくないのだ。この作品の男女観に従えば、家庭は女性の領域であり、男が理解できない領域なのである。

OLD MANはSelf ApprovalやMan-Machineなどの言葉と一見明快な論理で武装しているが、sexualな男の部分だけが満足を求めて動いているのだ。このようなOLD MANの自分勝手な立場を否定的に受け止めるYOUNG MANを配置することで、この作品はかろうじて哲学的雰囲気への対話になった。そうでなければこの作品は言葉を使い慣れた一老人による家庭を無視した放言にしか過ぎない。YOUNG MANが男の自己肯定に関してOLD MANにかなり同調している以上、YOUNG MANが女性を深く理解しているとは言えない。

女性のことを正面から取り上げることをできない、家庭内の微妙な動きを無視する男たちに対するMark Twainの嘆きなのである。「こんな男たちは駄目だ」という声が聞こえてくる。この作品はOLD MANの、そして多分間違いなく男

としての Mark Twain の謝罪告白なのだ。

Works Cited

- Clemens, Samuel Langhorne. *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. Ed. Sidney Berger. New York: W. W. Norton & Company, 1980.
- Cummings, Sherwood. *Mark Twain and Science: Adventures of a Mind*. Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1988.
- Doyno, Victor A. "Samuel Clemens as Family Man and Father." Eds. Laura E. Skandera-Trombley and Michael J. Kiskis. *Constructing Mark Twain: New Directions in Scholarship*. 28-49.
- Kiskis, Michael J. "Mark Twain and the Tradition of Literary Domesticity." Eds. Laura E. Skandera-Trombley and Michael J. Kiskis. *Constructing Mark Twain: New Directions in Scholarship*. 13-27.
- Mark Twain. "What Is Man?" *What Is Man? And Other Essay*. 1917. 東京：本の友社, 1988.
- . *The Autobiography of Mark Twain*. Ed. Charles Neider. New York: Harper Collins, 1959.
- . "Eve's Diary." *The \$30,000 Bequest and Other Stories*. 1917. 東京：本の友社, 1988.
- Skandera-Trombley, Laura E. and Michael J. Kiskis, eds. *Constructing Mark Twain: New Directions in Scholarship*. Columbia, Mo. and London: University of Missouri Press, 2001.
- Waguri, Ryo. "No. 44, *The Mysterious Stranger*: Twain's Final rejection of the Stranger." *Mark Twain and Strangers*. 東京：英宝社, 2004. 179-195.

注

¹ 本論は、2001年の日本マーク・トウェイン協会研究発表会で、那須頼雅氏が“‘What Is Man?’ の ‘Man’ は「男性」という意味ではないかと発言されたことに端を発している。ここに記して同氏に心より感謝する。なお、本論の責任はすべて著者にある。

² 例えば、Sherwood Cummings は次のように述べている

The master precipitation (and the culmination of a series of lesser ones) was his writing the first draft of *What Is Man?* in 1898. The main ideas for it came from three books he had read between 1869 and 1874—Holmes’s *Autocrat of the Breakfast Table*, Darwin’s *Descent of Man*, and Lecky’s *History of European Morals*—when determinism was foreign to his thinking.

(Cummings 45)

³ Michael Kiskis と Victor Doyno は *Constructing Mark Twain* の中で、それぞれ “Mark Twain and the Tradition of Literary Domesticity” と “Samuel Clemens as Family Man and Father” という論文を発表し、家や家族や家庭が Twain の作品理解の新たな視点であると主張している。

⁴ テキストは、Mark Twain, “What Is Man?” *What Is Man? And Other Essay* (1917. 東京:本の友社, 1988) を用いた。“What Is Man?” からの引用はすべてこの版による。以後このテキストからの引用は本文中の括弧内に頁番号のみ記す。なお、本論では、マーク・トウェイン、『マーク・トウェイン短編全集(上)』(勝浦吉雄訳、東京:文化書房博文社, 1993) も参考にさせていただいた。

⁵ Eve は次のように主張している。

I had created something that hadn’t exist before; I had added a new thing to the world’s uncountable properties; I realized this, and was proud of my achievement, and was going to run and find him and tell him about it, thinking to raise myself in his esteem—but I reflected, and did not do it.

(“Eve’s Diary” 370).

⁶ Pudd'nhead Wilson's Calendar に次のように書いてある。

Whoever has lived long enough to find out what life is, knows how deep a debt of gratitude we owe to Adam, the first great benefactor of our race. He brought death into the world.

—PUDD'NHEAD WILSON'S CALENDAR

(Wilson 12)

⁷ 自伝で Twain は次のように告白している。

Our first child, Langdon Clemens, was born the 7th of November, 1870, and lived twenty-two months. I was the cause of the child's illness. His mother trusted him to my care and I took him for a long drive in an open barouche for an airing. It was a raw, cold morning but he was well wrapped about with furs and, in the hands of a careful person, no harm would have come to him. But I soon dropped into a reverie and forgot all about my charge. The furs fell away and exposed his bare legs. By and by the coachman noticed this and I arranged the wraps again, but it was too late. The child was almost frozen. I hurried home with him. I was aghast at what I had done and I feared the consequences. I have always felt shame for that treacherous morning's work and have not allowed myself to think of it when I could help it. I doubt if I had the courage to make confession at that time. I think it most likely that I have never confessed until now.

(Autobiography 190)

⁸ Twain は初期のスケッチで極めて献身的な女性を描いている。“Whereas” に登場する Aurelia Maria は、両手両脚をなくし片目も髪の毛も失った婚約者を愛しつづける女性である。

⁹ 「マタイによる福音書」 5:27-28 参照。

¹⁰ 拙論 “No. 44, *The Mysterious Stranger*: Twain's Final rejection of the Stranger” 参照。